

# バンディングかわら版（第1号）

鳥類標識調査（バンディング）で得られた成果をお知らせするニュースレター

## 鳥類標識調査（バンディング）とは？



足環装着作業  
中のアオジ  
（撮影：仲村 昇）

みなさんは、「日本の足環をつけたアオジが韓国で初発見されました！」といったニュースをご覧になったことはないでしょうか？ これは、日本が世界各国との協働のもと実施している「鳥類標識調査」と呼ばれる調査の成果の一つで、累計約598万羽（詳細裏面参照）の鳥類に足輪をつけています。

調査を実施している山階鳥類研究所と環境省では、この調査をより身近に感じていただきたいと思います。このかわら版（ニュースレター）を発行することとなりました。今年度は2回の発行を予定していますので、これを機に、ぜひ「鳥類標識調査」に親しみを感じていただければと思います。

**どのような調査なの？** 1羽1羽を区別できる記号や番号のついた標識（足環）を野鳥につけて放し、その後標識のついた鳥を確認することによって、移動や寿命について調べる調査方法です。ヨーロッパで100年以上前に始まり、現在も世界各国でさかんに行われています。各国の標識センターは連絡をとりあいデータを交換しています。日本では環境省が山階鳥類研究所に委託し、全国に設定された鳥類観測ステーションを中心に調査を実施しています。調査を行うためには、野生の鳥を捕獲するための特別な許可（鳥獣捕獲許可）を受けなければなりません。

**どんなことがわかるの？（具体的な事例）** 長年蓄積された各種の放鳥・移動データから様々なことがわかってきています。例えば、身近な夏鳥であるツバメですら越冬地がどこなのかわかっていませんでしたが、標識調査により東南アジアであることが判明しました（右図）。他にも多くの鳥の移動結果が「鳥類アトラスWEB版」として公開され、環境保全や野生生物保全、鳥獣保護管理行政などに広く活用されています。

詳しくは

鳥類アトラス

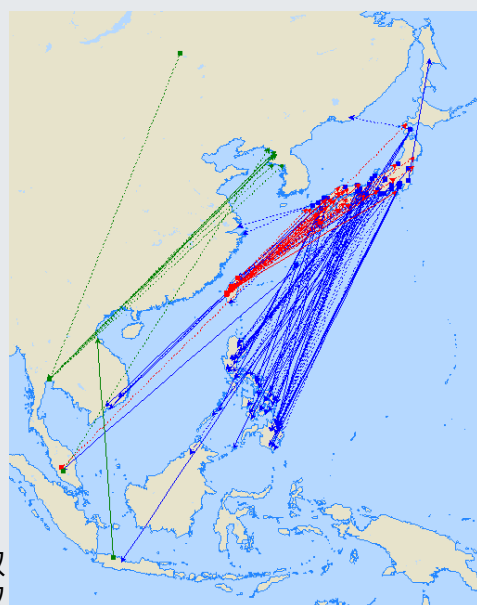


で検索してみてください。

### ツバメの移動の例

- 国内放鳥外国回収
- 外国放鳥国内回収、
- 外国放鳥外国回収

実線：6か月未満の回収  
点線：6か月以上の回収



**鳥類標識調査員（バンダー）ってどんな資格？** 調査を行う人を鳥類標識調査員（バンダー）といいます。バンダーは、鳥の識別について十分な知識を持ち、また鳥を安全に捕獲して放す技術を身につけていることが必要です。バンダーになるには訓練を積んだ後、山階鳥類研究所が実施する講習会に参加して資格を得なければなりません。資格を得たバンダーは、毎年環境省から鳥獣捕獲許可を受け、許可証を携帯して調査を行います。標識調査を担っている人の多くは、こうしたボランティアのバンダーたちなのです。

**鳥類標識調査にご協力ください！** 鳥類標識調査は、ボランティアで調査を実施するバンダーと、足環のついた鳥を見つける一般の方々の協力で成り立っています。バンダーを目指してみたい方、足環のついた鳥を発見した方、いずれも以下までご連絡ください。

宛先：山階鳥類研究所 保全研究室 鳥類標識センター  
〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115  
電話 04-7182-1107 FAX 04-7182-4342  
E-mail: BMRC@yamashina.or.jp

## どんな鳥に何羽くらい足環をつけているの？

2018年に足環をつけて放された鳥の総数は277種136,864羽（前年より9,724羽増）でした。上位3種は、アオジ（39,076羽）オオジュリン（16,624羽）、メジロ（5,646羽）です。1961年から2018年までの累計放鳥数は、496種、約598万羽（5,981,622羽）となりました。



## どんなことがわかるの？

### カワウの出生地からの分散・拡大の傾向 ～ 漁業被害対策としてのカワウの基礎生態情報の提供 ～

主に淡水域に生息するカワウは、大量の魚を食べるため、養殖をはじめとする内水面漁業に大きな被害を与え問題になっています。その対策として、有害鳥獣捕獲や繁殖を抑制する試み、GPSを用いたカワウの分布の広がり



を把握する調査などが実施されています。こうした対策をサポートするため、鳥類標識調査データを使い、カワウの分布拡大について調べました。少数個体の移動経路を細かく追跡するGPS調査と異なり、標識調査では多数の個体を追いかけて全体像をつかむことができます。

解析に用いたカワウの長期標識データ（1961-2017年）より

0歳（雛か若鳥）で標識された個体の標識場所から発見場所までの移動距離は、平均58km、中央値34km（最短2km～最長1,000km）でした。

移動先は生まれた県内か近県でした。移動先の県数は生まれた県数の約3倍。つまり繁殖地から周辺へ散っています。

| 標識県 | 発見県 | 例数  |
|-----|-----|-----|
| 千葉  | 千葉  | 119 |
|     | 神奈川 | 35  |
|     | 東京  | 21  |
|     | 茨城  | 18  |
|     | 栃木  | 13  |
| 東京  | 東京  | 79  |
|     | 神奈川 | 47  |
|     | 千葉  | 16  |
|     | 山梨  | 10  |
|     | 埼玉  | 7   |
|     | 茨城  | 6   |
| 静岡  | 静岡  | 11  |
| 愛知  | 愛知  | 43  |
|     | 静岡  | 25  |
| 滋賀  | 滋賀  | 26  |
| 兵庫  | 大阪  | 14  |
|     | 兵庫  | 11  |
| 島根  | 鳥取  | 13  |
|     | 島根  | 9   |
| 大分  | 大分  | 8   |

以上、多くの地域で長期間にわたるデータを収集することで、移動距離だけでなく、地域（県）の移動特性が明らかになりました。

カワウの被害対策を立案する際は、対策したい地域だけでなく、**対象地域の個体がどこから来ているか、どこへ行くのかといった移動特性を検討し、より効果的な地域で対策を考えることが有効**と考えられます。

長年のデータの蓄積により、多数の個体を出生地から追跡できたことは、他の調査にない標識調査の特徴です。

謝辞：本成果のデータの大半は鳥類標識調査員から提供を受けました。この場を借りて感謝申し上げます。